

## 私のお守り

小島百合江（愛媛県伊予市／55歳 女性）

お義母さんと暮らした六年間で、私があなたの涙を見たのは、一度きりでした。

結婚して二年たった頃、あなたは私に、「男の子を五人も産んだのに、誰も一緒に住んでくれん。もし百合江さんにもいやと言われたら、私らは看てくれる人がおらんようになる。」とおっしゃいました。その時のあなたの涙と孫ほど年の離れた私にそう言わざるを得なかった胸中を思うと、私には断る勇氣などありませんでした。

将敬さんの、実家を建て替えて両親に新しい家で少しでも長く住まわせてやりたいとの希望で、私たちは三年目に同居しました。正直私は不安でいっぱいでした。兄弟の中で一番若く未熟な私が、母屋の嫁としてやっていけるのだろうか？その日以来、私は我が家であつてもリラックスすることはなかったと思います。そんな私に、あなたは優しく接してくださいました。一緒に買い物に行ったり、コーヒーをよく飲みながら世間話をしましたね。海に近いこの町での生活は、とうに実家で過ごした年月を越えました。あなたから魚のさばき方、雑魚の料理法なども教わりました。「百合江さんの料理が私の味になったな。」と言われた時、どんなに嬉しかったことでしょう。

長女が生まれると、やっと内孫が抱けるようになったとそれは喜んでくださったのに、それから入院してしまったあなた。私が子ども達を連れて行くのを楽しみに待っていてくださいましたね。その頃の私は、病院と家、子ども達とお義父さんの世話に明け暮れ、無我夢中でした。

若かったからこそ、やって来れたのでしよう。やがてあなたは、長女が一年生になるのを見届けることもなく、静かに千の風になってしまいました。でも、その一週間ほど前、夜の付き添いをしていた私に、あなたは大切な宝物をくださったのです。

「百合江さんには世話になったけん、あの世から守ってあげるけんー。」

あなたのその言葉。私はどれ程勇気づけられたことでしょうか。その日から私は、家族に何かある時は仏壇に手を合わせ、家族の無事を願うようになったのです。おかげで子ども達は、受験、就職活動も無事に終え、社会人になりました。これから先、私達家族にどんな困難が待ち受けていても、お義母さんの言葉をお守りにして、乗り越えていこうと思います。

どうか私達のことをずっと見守っていてくださいね。